

杉野東山（一七六九～一八五一）の書

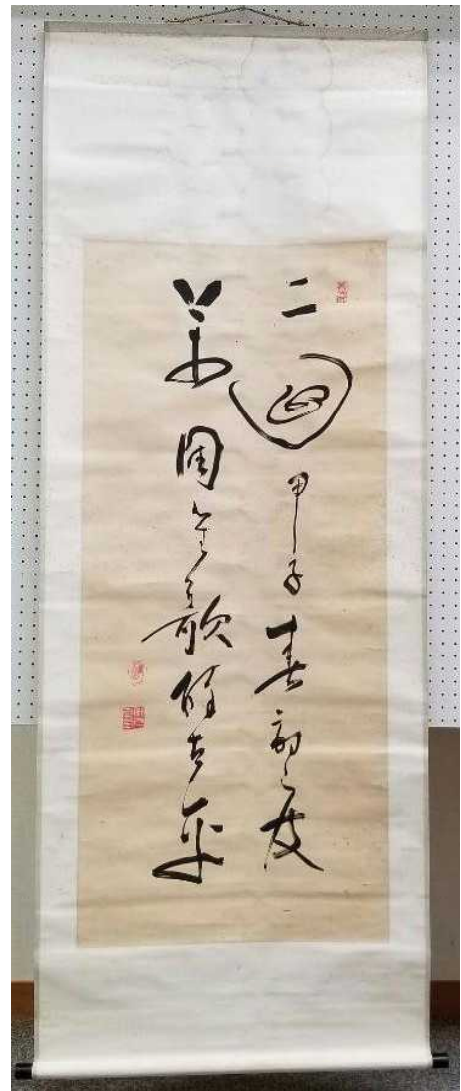
解説

京都和辻館文書解説室

解説責任 輿石 豊伸

令和八年（二〇二六）三月一五日

掛け軸 (二)



二回甲子春初度
萬国笙歌醉太平

(解)

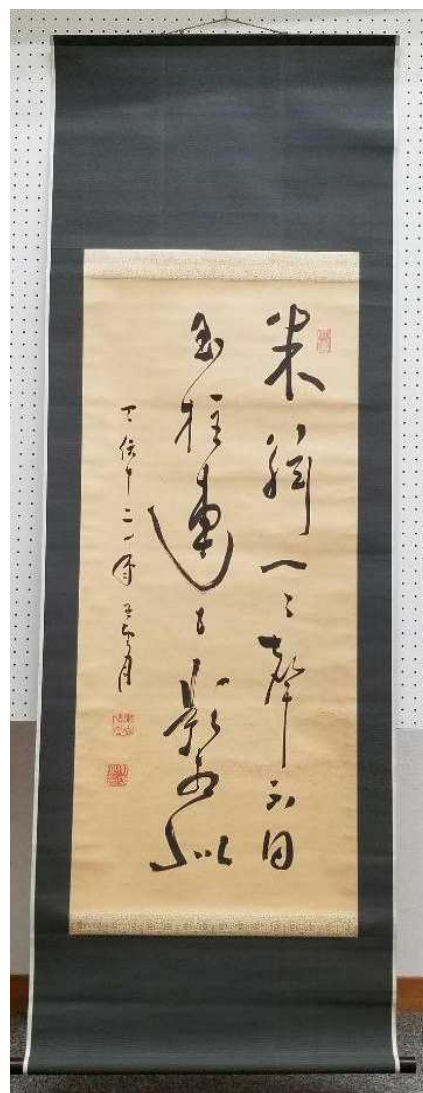
二回甲子春初度 にかい かつし はるはじ 春初めて度る
萬国笙歌醉太平 ばんこくしょうか たいへい 太平に酔う

二廻りの干支を迎え（還暦を迎えたことをいう）、新しい気持ちで進んでいこう。国々も笛を吹き歌って太平を謳歌してくれているではないか。

(補足)

「甲子」は干支の「きのえね」を表すとともに、干支（歳）の意でも用いられ、二回の甲子を迎えたというのは、六十歳になり還暦を迎えたことを表します。まさに還暦を祝う思いを記したもので、二句目の「萬国笙歌醉太平」は、中国唐代の詩人杜牧（とぼく）の「過華清宮絶句三首その三」に「萬國笙歌醉太平 倚天樓殿月分明」とある句からの引用です。ちなみに東山は明和六年（一七六九）の生まれですので甲子（干支）は「己丑（つちのとうし）」で二回りの「己丑」は文政十二年（一八二九）となり、この年の作と思われます。

掛け軸 (三)



朱弦一一聲不同

玉柱連々影相似

天保十三年 閏望月

(解)

朱弦一一聲不同

朱弦しゆげんいちいち 声こえ同じからず

玉柱連々影相似

玉柱ぎよくちゆうれんれん 影かげ相似あひにたり

天保十三年 (一八四二) 閏望月 (閏九月十五日)

弾かれる赤い弦からは一つ一つ異なる音が奏でられ、玉柱は連々として、影はみな同じ。

(補足)

これは中国唐代の詩人王諱 (おうしん) の「夜坐看搗箏 (夜座して箏を搗くを看る)」と題する詩の一部です。詩は夜灯の元で琴を聴く内容です。天保十三年は閏年で、九月の次に閏九月がありました。この閏九月の満月の夜、月を愛でながらこの漢詩を思い出し揮毫したものと思われます。

(参考)

「夜坐看搗箏」詩は以下の通りです。

調箏夜坐灯光里 こと しら よるざ 箏を調べ夜坐す とうこう 灯光の里 さと

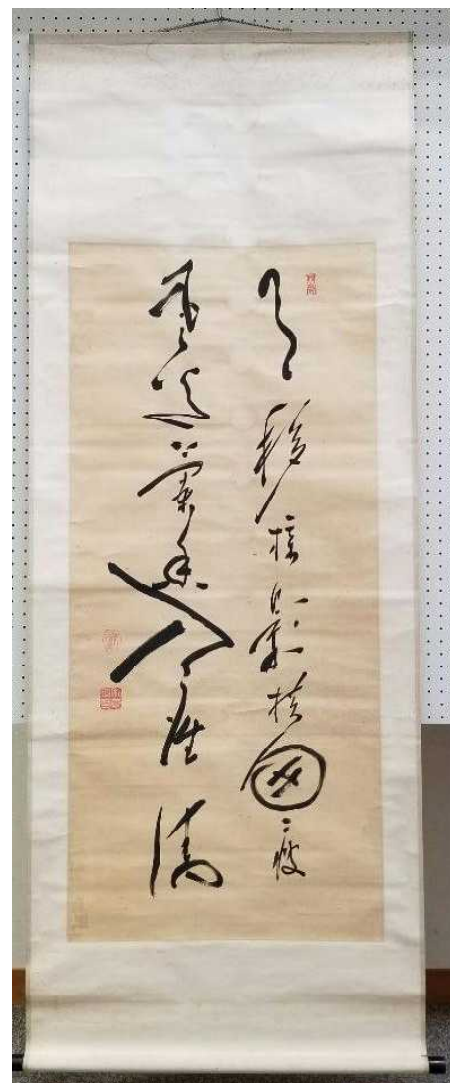
却挂羅帷露纖指 かへ かりて 羅帷を 掛けて 纖指 露はる

朱弦一一聲不同 朱弦一一 声同じからず
玉柱連々影相似 玉柱連々 影相似たり
不知何处学新声 知らず何れの 処より 新声を学ぶか
曲曲弹来未睹名 曲曲 弾き来るも 未だ名を睹ず
応是石家金谷里 応に是れ石家金谷の里なるべし
流传未满洛阳城。 流れ伝はるも 未だ洛陽の城を満たさず

夜坐つて琴を奏でている、うつすらと点る灯りの元で。かすかな灯りの中、薄い絹のカーテン（羅帷）を透して、ほっそりとした指（纖指）が現れる。薄明かりの中、赤く浮き出た弦から打ち出される音は一つ一つみな、違っており、玉柱（琴の弦を支える柱）はいつまでも変わることなく影となつて映し出される。どこからこの新曲を学んできたものか、次々に曲が演じられていくが、どれもまだ初めて接するものばかり、曲名も分からない。こんな新曲が生まれる里は、まさに石家金谷の里（音楽が盛んな里の意か）であるに違いないが、まだ洛陽の都には伝わっていないのだ。

（解説者訳）

掛け軸（四）



月移棕影扶勿渡
風吹菊香入座清

（解）

月移棕影扶勿渡
風吹菊香入座清

月は棕影に移り 勿を扶けて渡る
風は菊香を吹き 坐に入りて清し

月は棕の影に移り、窓辺に添って過ぎていく。

風は菊の香りを吹いて、人々のいる坐へと清い香りを満たす。

・ 勿（そう） 窓の意で用いる。

・ 扶勿（ふそう） 窓辺に添って移動する様をいう。

※漢詩からの引用と思われるが、出典は不明。

掛け軸（五）



三春月照千山路
十日華開一夜風

（解）

三春月照千山路 さんしゅんつきて せんざん みち
十日華開一夜風 とおかはなひら いちや かぜ

春の三ヶ月の間、月は多くの山路を照らしてきた。
十日かかって開いた花は、わずか一夜の風で散ってしまう。

（補足）

これは中国唐代の詩人温庭筠（おんていいん）の「春日將欲東歸寄新及第苗紳先輩」と題する詩の一部です。詩は長らく付き合ってきた友人が亡くなり死を悼む内容となっています。なお原詩では「路」は「道」となっています。

（参考） 「春日將欲東歸寄新及第苗紳先輩」を掲げます。

幾年辛苦與君同、得喪悲歡盡是空。
猶喜故人先折桂、自憐羈客尚飄蓬。
三春月照千山路、十日花開一夜風。
知有杏園無路入、馬前惆悵滿枝紅。

（全唐詩・卷五七八）

明

(補足)

魚	〔魚〕				
𩺰	佚八一·二	𩺰	前四·五五 ·七	𩺰	鳳魚鼎
𩺱	犀伯鼎	𩺱	穌治妊鼎	𩺱	簞生簞
𩺲	侯馬盟書	𩺲	魚鼎匕	𩺲	石鼓
𩺳	說文·魚部	𩺳	睡虎地簡一 〇·五	𩺳	一號墓竹簡 一二
𩺴	縱橫家書一 九	𩺴	孔宙碑陰	𩺴	丙午神鈎

– 10 –

掛け軸（七）



暦草（れきそう）

（補足）

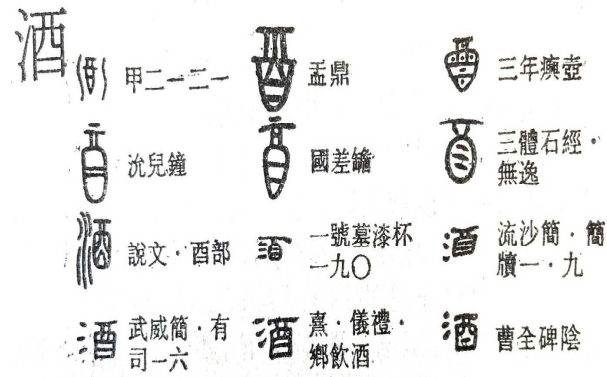
「暦草（れきそう）」というのは、萸萸（メイキョウ）という伝説上の草の別名です。中国古代の聖王・堯（ぎょう）帝の時代、月初めに一つの萸（まめこ）科植物で実をおおう殻（か）を生じ、それから十五日まで毎日一つずつ萸をつけ、十五日で十五の萸をつけるが、十六日からは一つずつ萸を落とし、三十日で萸がなくなるという不思議な草が生じます。これが萸萸で、この草が暦を表すというので、暦草と呼ばれるようになります。



釀酒（かみさけ）

（解）

「釀酒」は「かみさけ」と読みます。古代乙女が米を噛みそれを発酵させて酒を造ったことに由来します。「酒」の字は、秋に収穫した米や稗などの穀物を保管する酉（樽）を表す字でした。やがて酉の中で発酵した液体が洩れることから、水（さんずい）が付き、「さけ」の意になったとされます。ここに記された「酒」の字は、古代の「かみさけ」にちなみ、酒の原型である象形文字を記したものです。



漢語大字典・酒項目

掛け軸（九）



歡 喜 （かんき）

（解）

「歡喜（かんき）」は文字通り「ひじょうに喜ぶこと」を表しますが、また民間での信仰が厚い「歡喜天」の意をも含めての揮毫ではないかと思われます。歡喜天は災害を除き、夫婦和合の神として特に商家で厚く信仰されてきました。おそらくこうした家からの求めにより揮毫したものだと思われます。

掛け軸（十）



禮 讓 （れいじょう）

七十六書 東山篆

（解）

「礼讓」（れいじょう）は礼儀をつくして相手に譲ることを表します。『論語』に「能く礼讓を以て国を為むれば何ぞ有らん。礼讓を以て国を為むる能はずんば、礼を如何ん（礼儀と譲る気持ちを持つて国を治めたならば、どんな困難なことがありますか、ありません。礼儀と譲る気持ちを持つて国を治めることが出来ないならば、形だけ礼儀を行っても何の意味もないのです）」（里仁編）と見えます。一般に「礼讓」は「礼儀をつくしてへりくだる」などとされますが、本来は、相手の意見を能く聞き、己の主張のみせずに関手を立てる気持ちをもって譲るべきところは譲ることをいうのではないかと思われまゝ。社会を円滑にするには礼讓こそが大切ではないか、との思いから揮毫されたものと思われまゝ。

七十六書 東山篆 七十六歳の時に書かれたもので、「篆」は篆書体という中国古代（秦）の文字をいい、印鑑などで現在でも用いられています。



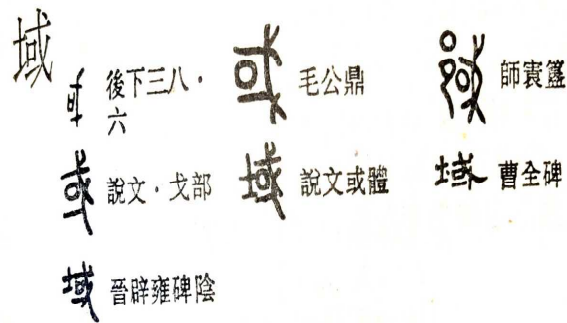
齋域 (さいいき)

(解)

「齋域」は、神を祀ってある身を清めなければならない聖域をあらわす語です。日本では「齋(略字・斎)」は「とき」とも読まれ、法事の折りの食事や、僧侶などに与える食事なども表しますが、基本は身を清め慎む意を表す語です。

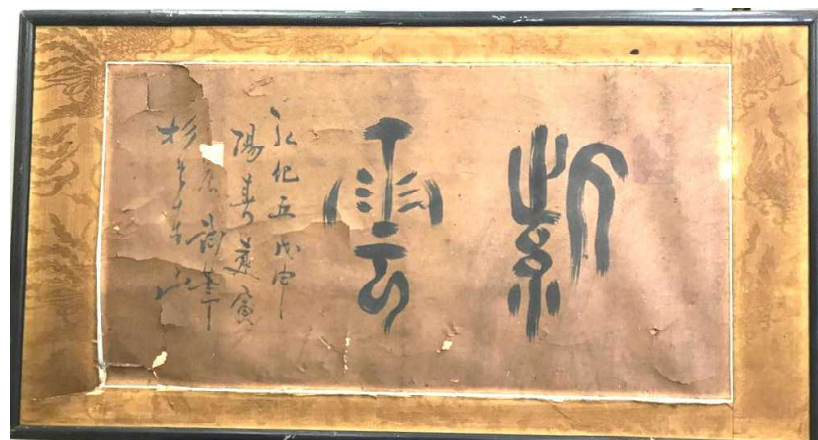


漢語大字典・齋項目



漢語大字典・域項目

掛け軸（十二）



紫

雲

弘化五戊申

陽春建寅

□辰 詞華

杉野東山

紫雲

弘化五戊申

陽春建寅

□辰 詞華

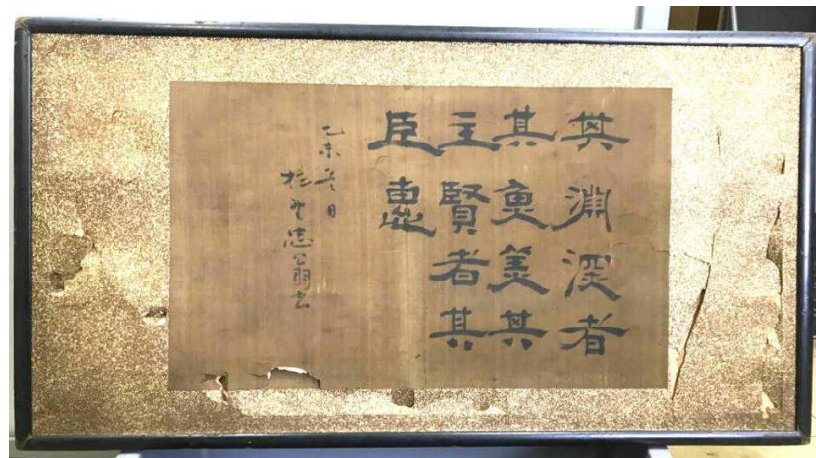
杉野東山

（解）

「紫雲」（しうん）は瑞雲（めでたいくも）のこと。仏教の世界では来迎図などに、往生する折り、仏様がこの雲に乗って迎えに来る姿が描かれたりします。

・弘化五年（一八四八）つちのえさる 戊申ときの辰けんいん 建寅 詞華 杉野東山
 戊申にあたる弘化五年（一八四八）の陽春（温かい）けんいん 建寅
 （二月を表す）の時、詞を記す 杉野東山

掛け軸（十三）



其淵深者
其魚羹其
主賢者其
臣惠

乙未冬日

杉野忠翁書

（解）

其淵深者 其魚羹

其の淵深ければ

其の魚羹し

其主賢者 其臣惠

其の主賢なれば

其の臣恵なり

乙未冬日 杉野忠翁 書

その淵が深ければ、そこに棲む魚は美味である。

主人が賢れているならば、配下の家臣も優れた力を発揮する。

乙未にあたる天保六年（一八三五）の冬 杉野忠翁 書

※中国古典からの引用と思われるが、出典は不明。